第１１課　神の刻印か、獣の刻印か

【暗唱聖句】

「彼らは、神の僕モーセの歌と小羊の歌とをうたった。「全能者である神、主よ、あなたの業は偉大で、驚くべきもの。諸国の民の王よ、あなたの道は正しく、また、真実なもの」黙示録15:3

【今週のテーマ】

三天使の使命は獣の刻印を受けないためのメッセージでもあります。今週は獣の刻印とは何か、いかにそれを避けることができるのかを学びます。

【日曜日・神の民を特定する神の刻印】

旧約聖書の時代、神の民を特定する印として割礼がありました。これは最初に、アブラハムとその家の者、そして後に続く子孫に与えられたものでした。余分な包皮を切り取ることによって血を流すことに意味があったのだろうと思われます。世界の割礼の歴史を調べていくと、古代のエジプトやユダヤ教から多くの影響を受けているアラブでも広く行われており、現在割礼を受けている男性は世界で10億人もいると言われています。

新約時代に入ると、外面上の割礼という印がもはや意味をもたないことを示されます。そして、心の割礼こそが重要であると教えられます。

「…割礼を受けていない者が召されたのなら、割礼を受けようとしてはいけません」第一コリ7：18

「…肉に施された外見上の割礼が割礼ではありません…霊によって心に施された割礼こそ割礼なのです」ローマ2:28、29

真の神の民は、心の中に内住する聖霊によって、その印がつけられていきます。そして、最も大切なことは、神様への信仰から生まれる愛によって新しく生まれ変わることです。

「割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです」第一コリ6:15

「キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です」第一コリ5:6

信仰が形骸化してしまうことを聖書は注意するように教えています。愛が欠落するとき、その信仰は形ばかりのものとなってしまいます。これが外面的な割礼に例えられているのです。大切なことは、新しくされること、すなわり、キリストに結ばれて、愛の実践を行う信仰こそ大切なのです。

また旧約時代に与えられた神の民としての印は割礼だけではありませんでした。もう一つ与えられたのは安息日でした。

「…あなたたちはわたしの安息日を守らねばならない。それは、代々にわたってわたしとあなたたちとの間のしるしであり、わたしがあなたたちを聖別する主であることを知るためのものである」出エジ31:13

安息日は割礼とは異なり、守らなくても良いとは一切言われていません。むしろ、世の終わりが近づく今だからこそ、そして多くの人たちが無視しているからこそ、大きな意味を持つのです。

【月曜日・獣と偽りの礼拝】

「また、別の第三の天使も続いて来て、大声でこう言った。「だれでも、獣とその像を拝み、額や手にこの獣の刻印を受ける者があれば、その者自身も、神の怒りの杯に混ぜものなしに注がれた、神の怒りのぶどう酒を飲むことになり、また、聖なる天使たちと小羊の前で、火と硫黄で苦しめられることになる」黙示録14:9、10

第三の天使は、獣の刻印を受けるならば、神の怒りによって、滅びゆくことになるとはっきり宣言しています。神の印を受けるものたちが永遠の天国で、神様を褒め称えるのに対して、何という恐ろしい結末でしょうか。このような結末が描かれているのは、私達を怖がらせるためでしょうか。あるいはそうでしょう。しかし、それは獣の刻印を押されてはならないというメッセージでもあるのです。

　この獣の刻印は、「獣とその像を拝み」とあるので、偽りの礼拝を捧げる者たちであることがわかります。この獣は「時と律法を変えよう」（ダニエル7：25）と企みます。つまり、偽りの安息日（日曜日）を守ることが、獣を拝むことにつながっていくということです。それゆえ、第一天使は大声で、「神を畏れ、その栄光をたたえなさい。神の裁きの時が来たからである。天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい」（黙示録14:7）と、 大声で天地創造の神を拝むようにと、わざわざ天地創造の記念日である真の安息日である代７日土曜日を意識させているのです。

【火曜日・神の刻印】

通常、印が押すのは、書類の正当性を証明するためであり、また所有権を表します。神の刻印が押されるということは、神様の所有であることを証明するものであり、神の刻印を押された民は、神様のもの、神の民ということを保証するものとなります。

「あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり…」エペソ1:13、14

神の刻印とは目に見えるものではありませんが、単なる象徴でもありません。実は、聖霊がうちに住んでくださることが証印となると聖書は教えています。神様を信じる者たちにのみ与えられるのが聖霊です。そして聖霊は「わたしたちが御国を受け継ぐための保証」となるのです。

「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです」エペソ4:30

聖霊は私達が御国を受け継ぐための保証なのですが、その聖霊を悲しませるようなことをしてはいけないと教えられています。せっかく与えられた保証を放棄することになるかもしれないからです。

「わたしは、刻印を押された人々の数を聞いた。それは十四万四千人で…」黙示録7:4

「また、わたしが見ていると、見よ、小羊がシオンの山に立っており、小羊と共に十四万四千人の者たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とが記されていた」黙示録14:1

また、もう一つの神の刻印が、終末時代に生きる特別な民たちの上に押されます。その数は14万４千人であると書かれてあり、その刻印は額におされ、小羊の名と、小羊の父の名とが記されています。彼らは聖霊の働きによって神の品性を反映するようになります。

　さて、神の印を押される者と獣の印を押されるものの大きな違いは、何を礼拝しているかです。天地万物を創造された神なのか、それとも悪魔なのか。額に印が押されるとは、その人の思いが印を押したものの思いと一つになっていることを意味しています。手に獣の刻印を押された者たちとは、思いが完全に悪魔と一つになっているわけではありませんが、恐怖から悪魔を拝む人たちを象徴していると考えられます。

【水曜日：獣の刻印】

「第二の獣は、獣の像に息を吹き込むことを許されて、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた。また、小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由な身分の者にも奴隷にも、すべての者にその右手か額に刻印を押させた」黙示録13：15、16

獣の像を拝むものたちには、獣の物であることを象徴する獣の刻印が押されることになります。この獣はローマ法王権力を象徴しているので、それを拝むということは、聖書の教えとは異なる偽りの教えである日曜安息日を守るということを意味していると考えられます。ただ、いま日曜礼拝をしている人たちが獣の刻印を押されてしまっているのかというと、決してそうではありません。それはまだです。時は残されていますし、真の安息日が土曜日なのか、それとも日曜日なのかが、もっとクローズアップされるときが来て、それでもなお日曜日を守るなら獣の刻印を押されることになるのでしょう。ただ、ノンクリスチャンが多い日本人などは、どのようになるのでしょうか。

【木曜日：刻印としての安息日】

「安息日を心に留め、これを聖別せよ」出エジプト20:8

安息日は、天地創造の記念として聖なる日として制定されました。だから、わたしたちが安息日を守るということは、それは漠然とした神様ではなく創造主を拝むことであり、それはまた、わたしたちがそのみ手によって作られた被造物であることを認めていることを意味しています。

「それで、安息日の休みが神の民に残されているのです。なぜなら、神の安息にあずかった者は、神が御業を終えて休まれたように、自分の業を終えて休んだからです」ヘブル4：9,10

また、わたしたちが安息日を守るのは、この世界は6日間かけて創造され、第七日目に神様が休まれたように、わたしたちも同様に第七日目にすべてのわざを終えて休むためです。そして、この日を聖別することによって、私達自身も神様から聖なるものとされていることの印となることが聖書で教えられています。